連載

市長室からこんにちは

vol. 68

益田市長
山本 浩章

明治維新150年の今年、脚光を浴びる維新の英傑はたいてい薩摩や長州など「官軍」側の人物です。しかし、「賊軍」とされた幕府側にも多くの人材がいました。なかでも群を抜く才知と胆力を併せ持っていた忠臣といえば小栗上野介忠順です。

1827年に名門旗本の家に生まれた小栗は、34歳のとき遣米使節に加わり、不公正だった日米の貨幣交換比率の改定交渉に臨みました。両国の小判と金貨の貴金属の含有量を科学的に実証し、粘り強く堂々と主張したその態度は相手方に強い印象を与え、現地の新聞までもがこぞって賞賛しました。外国人が最初に認めた「サムライ」は小栗だったのかもしれません。

帰国後、外国奉行を皮切りに、勘定奉行、江戸町奉行、海軍奉行、陸軍奉行などの要職を次々と歴任しました。平生は疎んじられる小栗の鋭すぎた頭脳が、事態が切迫する度に必要とされたのです。

滞米中の見聞から、鉄こそ国家発展の要と確信した小栗は、1865年、横須賀製鉄所の着工に踏み切ります。財政はすでに火の車で、徳川の威信も揺らぐ中、巨額の投資に対する反対の声もありました。小栗はその思いを「幕府が滅んでもその遺産が将来の日本のためになれば幕府の名誉だ。どうせ家を譲り渡すのなら土蔵を付けてやりたい」と親しい知人にのみ打ち明けました。

しかし小栗の胸中を理解せずその手腕をただ恐れた新政府は、政権を握るや、不確かな罪状で小栗を捕縛し、まともな裁判にもかけないまま、1868年5月27日、処刑してしまいました。

その37年後の同月同日は、日露戦争の勝利を決定づけた日本海海戦の日となりました。連合艦隊を率いた東郷平八郎は、のちに小栗の子孫を自宅に招き、「勝てたのは小栗氏のお陰です」と丁重に礼を述べました。小栗の死後完成した横須賀製鉄所が後に海軍工廠となり、そこで艦船を随時整備できたため、いつも万全の状態で海戦に臨めたからです。

今年は、救国の恩人でもある不世出の逸材の刑死からも、やはり150年なのです。

中世益田講座　我ら、益田氏家臣団！編（全12回）

最終回　内田氏・俣賀氏（下）

【問い合わせ先】
市文化財課　☎31-0623

6月号から「益田市の歴史文化の特色」（全7回）を掲載します。

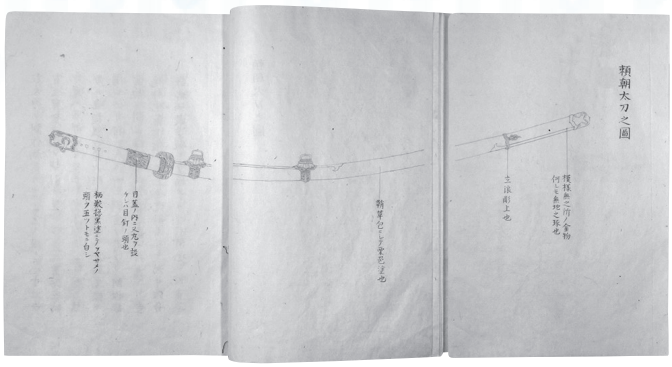
※4月号の（中）より続く

15世紀の第3四半期頃まで、内田氏、下俣賀氏はいずれも石見守護から直接文書を宛てられており、（益田氏の家臣ではない）独立した領主と認識されていました（上俣賀氏についてはこの時期以降の文書が少ない）。

しかし、次第に彼らは益田氏の支配下に取り込まれていったと考えられます。たとえば永享七（1435）年に益田氏一族・家臣ら106人が松寿（のちの益田兼堯）に忠誠を誓った文書には横田致慶という内田氏の一族と思われる人物が署名しています。また、文安六（1449）年に下俣賀氏の孫三郎は元服（成人）に際して、益田兼堯から「堯」の字をもらい、堯致と名乗っています（致堯とも名乗る）。

15世紀の終わり頃には完全に益田氏の家臣になったと思われ、下俣賀氏の古文書にはさまざまな合戦で益田氏の家臣として活躍した様子が伝えられています。それはこの時期の文書があまり残っていない内田氏や上俣賀氏も同様だと思われます。

江戸時代に萩藩が藩内のさまざまな器物を調査した記録「防長古器考」には、益田家所持の刀として「頼朝公之太刀」が収録されています。これは源頼朝が工藤祐時（曾我兄弟の仇討ちで殺害された工藤祐経の子）に与えたもので、その子孫が益田氏に献上したと記されています。系図では、内田氏の祖致茂は工藤祐時の子とされていますので、この刀を益田氏に献上したのは内田氏または俣賀氏と考えられます。



「防長古器考」有図第七（山口県文書館所蔵）の源頼朝太刀之図